



2026年度入学試験問題

国

語

注 意

- 一 問題冊子は一冊（十九ページ）、解答用紙は二枚です。
- 二 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等により解答できない場合は、手を高く挙げて監督者に知らせなさい。
- 三 すべての解答用紙に、それぞれ二箇所受験番号を算用数字で記入しなさい。
- 四 解答は、すべて解答用紙の指定されたところに書きなさい。
- 五 試験終了後、問題冊子は必ず持ち帰りなさい。

問題 一

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(出題の都合上、本文に手を加えたところがある。)

人間の物語は、祖先がしだいに熱帯雨林を離れ、樹木のない草原へと歩を進めるようになったところから始まる。肉食獣の徘徊する草原では、屈強な男たちが遠くまで足を運んで食物を探し、それを安全な場所まで持ち帰って女や子どもたちといっしょに食べるのが重要になる。直立二足歩行はそのために発達したのだ。このとき、安全な場所で待っている人々は食物のありかや採取した状況を知らない。果たしてその食べ物が食べられるものかどうか、自分で確かめるすべはない。仲間を信じ、仲間が伝える情報を頼りにその食物をいっしょに食べ、自分がその食物を探すことになったらその情報を利用するのである。ここに、自分が参加していない場所での情報を共有する必要が生じ、人間的な物語が生まれる。言葉がない時代だから、祖先たちは手ぶりで身ぶり、物を用いて情報を伝えたのだろう。

①人間に確実な物語をもたらしたのは道具である。シロアリを釣る棒や、硬い木の実を割る石器など、簡単な道具はチンパンジーも作ることができる。しかし、その道具を仲間と共有し、さらに改良を加えていく技術は人間だけの特徴だ。最初の石器が現れたのは約260万年前で、石を割ってその破片で植物を切ったり、肉食動物が残した獲物から肉を切り取るために用いたようだ。ハイエナが噛み砕けない硬い骨を石器で割って、骨髓を取り出して食べていたらしい。この石器は仲間の間で繰り返し用いられ、しだいに左右対称形の握りやすい握斧(ハンドアックス)へと変わっていく。これらの仲間と共有された道具が存在するということは、その道具によって伝えられる物語も共有されたということである。つまり、その道具によって、何を、いつ、どこで、どのように処理したのか、というストーリーを共有できたのである。

道具はだんだん精巧に、そして多様になる。それは、多くの人々が新しい物語を付与し、その物語に沿って道具が変容してきたことを示唆している。さらに、道具に複雑な手が増えられると、それを使う場所に放置するのではなく、持ち運ぶようになるし、所有物としての価値が出てくる。道具を作るのが上手な人が現れ、革新的な道具によって世界が変わる。たとえば、80万年

問一 二重傍線部アイウの読みを、送り仮名も含めてすべて平仮名で書きなさい。現代仮名遣いを用いてもかまわない。

問二 傍線部①と同じ意味で「卒」が使われている文を、次のA～Dから一つ選びなさい。

- A 士卒戦はず、城門閉ぢず。
- B 孔子卒後、今に至るまで五百歳。
- C 儒道深奥、倉卒にして成るべからず。
- D 卒然辺境に急有り。

問三 傍線部②「盍往乎」について、次の二つの間に答えなさい。

(1) 現代語訳しなさい。

(2) この文は、「何□往乎」と言い換えることができる。この□に入る漢字一文字を答えなさい。

問四 傍線部③を全て平仮名で書き下し文にしなさい。現代仮名遣いを用いてもかまわない。

問五 傍線部④について、斉女と趙衰らが「酔重耳、載以行」という強引な手段をとったのはなぜか、重耳と斉女の考えを対比させながら説明しなさい。

ほど前に火を用いることを覚えた人類は、火を起こす道具を考案することによって、50万年前には常に火を使えるようになった。長い間、狩猟は小型の動物が対象で、大型の動物を狩るのは肉弾戦だった。しかし、20万年前に現れた現代人（ホモ・サピエンス）は遠くまで槍や石を投げられる道具を製作することによって、大型動物の狩猟を成功させた。さらに、動物の骨を加工して縫い針を発明し、毛皮を縫い合わせることによって厳寒のシベリアへと数万年前に進出できるようになった。未知の土地へ進出することによって新たな必要性が生まれ、それを解決するために道具が考案され、それがまた新たな夢を人類にもたらす。その繰り返しによって、人類は新たな物語を次々に創り出し、世界を自分のものにしていったのである。

人間が現代のように言葉をしゃべるようになったのは、7万～10万年前ごろだろうと言われている。30万年前に登場し、3万年前まで生きていたネアンデルタール人も言葉をしゃべっていたが、現代人のように自在に言葉を操ることはできなかったと考えられている。それは、ネアンデルタール人の遺跡に、**ソウシヨク**品や象徴物があまりにも乏しく、物を遠くまで伝達した証拠がないからである。集団も十数人という単体の家族で、集団どうしでコミュニケーションを取り合うことはあまりなかったようだ。

一方、言葉は現代人の能力を飛躍的に発展させた。物と違って言葉は重さがなく、何処にでも持ち運べるし、**クサ**ることがないので時間をも超越する。おかげで人類は、時間と空間を超えるスケールで、大きな物語をより多くの人々と共有できるようになった。それは、人々をつなげる接着剤となり、集団内の協力や連帯を強固にし、集団間をつなげてより大きな重層的な社会を作り上げる役割を果たした。

言葉は意味を作る。人間や動物の行動に因果関係を見出し、ストーリーを作る。空間的な関係に意味を持たせるには、そこに時間を組み込む必要がある。言葉によって、人間は現在を過去と未来から分離し、時間的な流れに沿って自分の生き方に意味を見出すようになったのである。さらに、死という現象を終わりや消滅とみるのではなく、新たな世界への旅立ち、転生や再生の入り口として見るようになった。宗教はこうして生まれた。キリスト教の新約聖書に「この世は神の言葉から創られた」と書かれているのはそのためである。言葉はロゴス（論理）を創り、以来人間は言葉によって世界を解釈するようになったからである。

しかし、考えてみると言葉はサルから受け継いだ人間の五感のうち、視覚と聴覚を拡大したものに過ぎない。霊長類は視覚優

位の世界をコウチクしてきたのであるが、言い換えれば人間にとって、真実は見ることによってもたらされ、言葉とそれに続く科学技術は、その視覚世界を広げようとした努力の賜なのである。それは人々のつながりを増やし、社会を拡大した。だが、人々の信頼は視覚や聴覚には代替できない嗅覚、味覚、触覚に大きく依存している。親しい人の匂い、懐かしい味の記憶、肌の触れ合いが人々のきずなの源であることは、現代でも変わっていない。言葉や科学技術は人や物の移動、情報の共有によって視覚世界を大きく広げ、人間のつながりを増やしたが、人間どうしの信頼の輪を強化し広げることには大して役立っていないのではないだろうか。

③ そればかりが言葉は一方で、人間に負の効果ももたらした。自然とはかけ離れた物語を創り出すことによって暴力や戦いに人々を駆り立てるようになったのである。言葉は自然の摂理とは違う解釈を与える。「オオカミのように残忍な」、「ブタのように不潔な」、「ウシのように愚鈍な」といった表現は人間からの一方的な見方である。そして、逆に人間を動物のように見立てることによって、排除や殲滅を可能にする。本来、狩猟という経済的な行為を人間との争いに当てはめて、狩猟具を用いて人間を狩り立てる。そういった行為に不可欠なのは、集団のために身を捧げるという不思議な精神性である。動物の群れはそれぞれの個体の利得から成り立っていて、自分の子を守るためでなければ、命を懸けて集団のために尽くそうなどということは起こらない。だから、争いはいつも個体レベルで終結する。ところが、人間は血縁関係もない人々によって作り上げられた国家に忠誠を誓い、国家間の争いに命を懸けて参加する。これほど不可思議で、自然に反した行動はない。

グローバルな世界は、ここ数世紀の間に急速に発展した科学技術によって登場した。とりわけここ数十年のコミュニケーション技術の変革は、人間どうしに新たなつながりを創り出している。空間の制約を一気に取り払って、人々が同時に膨大な数の人間と情報を共有できるようになったのだ。しかも、その情報は急速に増加し、もはや人の手で処理できずにAI（人工知能）によって分析され、社会がその結果に頼るようになりつつある。人の物語が情報化され、それがAIによって新たな物語に作り変えられるようになっているのだ。

④ これは人間の物語の終わり、すなわち人間の終わりを意味する、と私は思う。AIは人間の持っている感性と知能から、知能

留^{マルコト} 齊^ニ凡^ソ五歳。重耳^シ愛^{注六}齊女^ヨ。母^{ナシ}去^ル心。重耳^ク曰、「人生安楽^{ナリ}。孰^{たれカ}知^{ランヤ}ニ
其他^ノ。必^③死^ヲ於^ニ此^ニ。不能^シ去^ル」。齊女^ク曰、「子^ハ一^ノ国^ノ公子^{ニシテ}。窮^{シテ}而^{キタ}来^ル此^ニ。数^ニ
士^ハ者^テ以^テ子^ヲ為^ス命^ト。子^{ズシテ}不^ニ疾^{カヘリ}反^ニ国^ニ報^イ勞^ニ臣^ニ。而^{おもフ}懷^{注七}女^ヲ德^{ヲウ}。窃^{ためニ}為^{ハツ}子^ノ羞^レ之^ヲ。且^ツ

不^レ求^メ、何^{いづれノ}時^{ニカ}得^{ント}功^ヲ。乃^チ与^ニ趙衰^等謀^リ、醉^④重耳^ヨ、載^{セテ}以^テ行^ク。

（『史記』による）

- 注一 里克Ⅱ晋の大臣。
- 注二 奚齊・悼子Ⅱいずれも猷公の子。重耳の異母兄弟。
- 注三 宦者履鞮Ⅱ晋の恵公に仕えていた宦官。
- 注四 收恤Ⅱ救い助ける。
- 注五 管仲・隰朋Ⅱいずれも齊の桓公を補佐した宰相。
- 注六 齊女Ⅱ齊国の公女。重耳が齊に來たときに妻となった。
- 注七 女德Ⅱここでは女性を好む心情のこと。
- 注八 載Ⅱ馬車に乗せて。

問題 四

次の文章は、春秋時代の覇者として知られる晋の文公(文中の重耳)が、晋国の君主となる前の出来事を述べたものである。重耳は、父である献公の後継争いの影響により亡命し、側近の趙衰らとともに各国をさまよっていた。これを読んで、後の問に答えなさい。(出題の都合上、本文に手を加えたところや訓点を省略したところがある。)

重耳遂^ニ奔^ハ狄^ニ。狄其母国也。是時重耳年四十三。居^ル狄五歳^ニ而^{シテ}晋^ノ献公^①卒^リ、里克^{注一}已^ス殺^シ奚^{注二}齊^ニ・悼子^{注三}乃^チ使^メ人^ヲ迎^ヘ、欲^ス立^テ重耳^ヲ。重耳畏^レ殺^{サル}、因^リ固^ク謝^シ、不^ア敢^ラ入^ル。已^ニ而^{シテ}晋更^ニ迎^ヘ其弟夷吾^ニ立^テ之^ヲ、是為^ス惠公^ト。惠公七年、畏^レ重耳^ヲ、乃^チ使^メ宦者^{注三}履鞮^ニ与^ニ壮士^ヲ、欲^ス殺^{セント}重耳^ヲ。重耳聞^キ之^ヲ、乃^チ謀^リ趙衰等^ニ曰^ク、「始^メ吾奔^ル狄^ニ、非^ズ以^テ為^ニ可^ニ用^ニ興^ニ、以^テ近^ク易^ク通^ジ、故^ニ且^シ休^ム足^{コト}久^シ矣、固^マ願^ニ徙^フ之^ニ大^ニ国^ト。夫^レ齊桓公^ニ好^ミ善^ヲ、志^リ在^ニ霸王^ニ、收^{注四}恤^シ諸侯^ヲ。今^ク聞^ク管仲^{注五}・隰朋^ニ死^{スト}、此^レ亦^ス欲^ス得^ニ賢佐^ヲ。盍^②往^ニ乎^ニ。」於^テ是^ニ遂^ニ行^ク。

だけを發展させた情報^オ「ケンサク」機械である。それに学習機能が加わって「考える」ことが可能になった。しかし、愛とか感動とか衝撃とか、不快や愉快などの心の動きといった、人間にとっては情報にならない部分こそが生きる上では重要だし、それが生きる意味になる。人間の心は外から完全に読むことはできない。だからこそ、あらゆる手掛かりを用いて相手の気持ちを探ろうとする。そこには視覚や聴覚だけでなく、嗅覚や味覚や触覚が総動員される。しかも、どんなに努力しても相手の手を完全に理解することはできない。それは、人間以外の他の生物を相手にしても同様である。どんなに忠実な犬も、いつも寄り添ってくれる猫も、人間にとっては永遠にわからない存在であるし、だからこそ愛着がわき、働きかけようとする動機が生まれる。機械のようにすべて与えられた情報で動き、操作可能なものだったら、こうしたやり取りは生まれない。

人間にとって、いかなる科学技術を駆使しても、これまでの物語は互いにわかりえないことを前提に作られてきた。それぞれの生物種や同じ種に属する人間どうしでも、コミュニケーションは互いに違うことを条件に発達してきたのである。そもそもすべての個体が全く同じであつたら、コミュニケーションをする意味がない。同じ現象に対してそれぞれ違うように反応することこそ、そこに何らかの合意を作る必要が生じ、共存という状態が作られる。形も生理も違うものどうしが完全にわかりあうことは所詮不可能なのである。しかし、これからの物語は「わかること」への磁力に強く引き付けられていくように見える。機械はすべてを同質に作ることを目指す。これから起こる現象を100%に近い確率で予想することを目指す。期待値の高さ、つまり予定された成果がビジネスや人間関係にとって重要な要素になる社会が到来している。それはAIが活躍し、人間が不確実な、しかし生きた物語を手放す時代でもある。しかし、本当にそれでいいのだろうか。人類の生物としての進化の歴史に立ち返って、もういちど私たちの未来を見つめ返さねばならないのではないか。私はそう思っている。

(山極寿一『争いばかりの人間たちへ ゴリラの国から』による)

問一 傍線部**アイウエオ**のカタカナ部分を漢字に直しなさい。

問二 傍線部①について、「人間に確実な物語をもたらしたのは道具である」とはということか、「道具」の共有前のことをふまえて、わかりやすく説明しなさい。

問三 傍線部②について、「自在に言葉を操る」とはどういうことか、「言葉」の性質をふまえて、本文に即してわかりやすく説明しなさい。

問四 傍線部③について、「それ」「負の効果」の内容を明らかにしつつ、ここで筆者が主張していることを、わかりやすく説明しなさい。

問五 傍線部④について、「人間の物語の終わり、すなわち人間の終わりを意味する、と私は思う」と筆者が思う理由を、「物語」のあり方や役割の変化をまとめながら、説明しなさい。

(次のページにも問題があります。)

問一 傍線部アイウエを現代語訳しなさい。

問二 破線部①は、ある文芸を指す。この文芸は、和歌の上の句（五七五）と下の句（七七）を交互に別の人が続けていく遊びである。破線部①が指す文芸の名前を答えなさい。

問三 破線部②は妹背山のある吉野への出立を詠む歌の一部である。掛詞に注意して出立の理由を説明しなさい。

問四 【旅の終わり】の場面における公条の状況と心境の変化について、家に帰り着くまでと帰り着いた後を対比させて説明しなさい。

（次のページにも問題があります。）

問題 二

次の文章は、南木佳士「冬物語」の一部である。医者である語り手は、冬になるとワカサギ釣りに熱中していた。ある時、釣りの最中に誤って湖水を割ってしまっておぼれかけたところを、近くで釣りをしていた園田かよさんに助けられ、かよさんの家で服を乾かすことになる。これを読んで、後の間に答えなさい。(出題の都合上、本文に手を加えたところがある。)

ヤカンの湯が沸くまでに、かよさんは台所に立って大根と油揚げのみそ汁を作り、ネギのたっぷり入った納豆をかき混ぜて朝食を出してくれた。すみません、と礼を言ったら、ネギの香りが鼻につき、ふいに涙が出そうになった。うらかな日曜の朝、いい歳をして初対面の他人の家で朝食をごちそうになっている。そのあつかましさと、ここまでに至る毎日の行動のうわつき加減に思いをめぐらすと、今ここにある自分がたまらなく情けなくなってしまったのだった。下唇を突き出して涙をこらえ、とりあえずめしをもらい、熱いみそ汁を飲んだ。薪ストーブのおだやかな輻射熱^{ふくしゃねつ}では暖まりにくかった冷えきった体の芯がほぐれ、こわばった心身が楽になってきた。

「ちよつくら父ちゃんにめしやつてくるから」

かよさんはそう言って朝食を載せた盆を手にし、奥の部屋に入って行った。

かよさんから正式な自己紹介を受けた覚えはない。この朝、彼女の家に入るとき見た園田安男・かよという消えかけた表札でその名を知ったのみである。

園田安男さんは台所のとりの、もう一つ奥の部屋で寝ていた。脳出血の後遺症で右半身がきかなくなり、三年前から寝たきりになっているのだった。

白髪の坊主頭に茶色のしみの浮く安男さんは絶えず笑っていた。頬の筋肉に締まりがなくなってしまった結果としての表情に過ぎないのかも知れないが、それは見る者を深いところで安心させてくれる無防備な笑顔だった。

安男さんに食事を与え終えて台所にもどってきたかよさんに、

道すがら^{注五}障礙なく^{しやうげ}帰りし事申して、野宮寺より出で立ちしかば、ここに帰り着きて、いつしか名残惜しげにてみな別れにけり。

やがて^エ立ち^エ降りても、独り住みの床も荒れて、道すがらの物語りすべき便りもなければ、

語るべきことはかずかず涙のみ古き軒端^{注七}のつまなしの花

ぞかひなきや。

老の坂上り下るものたびを限りと思ふに深き山道

今生の宿望、末世の結縁、満足するものなり。

『吉野詣記』による)

注一 床離れⅡここでは、公条が四十二年あまり連れ添った妻に先立たれたことを指す。

注二 御影堂Ⅱ後鳥羽院を祀る堂。

注三 男山八幡Ⅱ石清水八幡宮のこと。水無瀬の対岸にある。

注四 邂逅Ⅱここでは思いがけないことを指す。

注五 障礙なくⅡ障害なく。

注六 野宮寺より出で立ちしかばⅡ都を出立する際に野宮寺に集合したと見られる。

注七 つまなしⅡ梨のこと。

問題 三

次の文章は、三条西公条が紹巴・宗見らとともに旅に出立した場面および旅の終わりの場面である。これらを読んで後の問に答えなさい。(出題の都合上、本文に手を加えたところがある。)

【出立】

いにし年の秋、はからず年ふごろ臥注一しなれたる床離れ、かきつくべき心地もなく、あはれ修行にも出で立ちなばやと思ひつつ、とかく紛れしに、紹巴とて筑波①つくばの道に心ざし深く、このころ都の住まひし侍りて、夜昼来訪きじかうひけり。しかも敷島の大和の国の人にて、道たどたどしからず、吉野アの花見るべきよしいざなひけり。さらばとて、人々に言ひ触ることなくて、無下に顔知らぬ人、宗見といふ人を召しつれて、今年天文二十二年二月二十三日の朝、ひそかに都を出で侍るとて思ひ続けける、名残思ふ妹背②に逢へる道やあると吉野の奥を尋ねてぞ問ふ

【旅の終わり】

十三日。早朝に御影堂注二に参れり。男山八幡に参り、帰るさ御釈迦しゃかのおはします堂にて、ある人酒すすめ帰りぬ。このほどの疲れゆゑ、心地あしく、今日は臥し暮しけり。

十四日。水無瀬より輿こしにて帰りにけり。羽束師はつかしの森のほとりにて、輿を立てたる所にて、このあたりの名所ども、大方ここを限りなるとて、

旅衣たち隠ればややつれ来し身をはづかしの森の木陰に 紹巴

返しに、

注四邂逅ぐわくごと思ふ日数も積もりつつ早やはづかしの陰に来にけり

都出でし日数、二十日になりにけり。かくて東寺南大門まで都より迎へに人々来たり。これより乗物を返し、うち帰りにけり。

「どなたか病人でもおられるんですか」と、問うてみた。

「ああ、父ちゃんがな、寝たきりだよ」
かよさんはあつさりと答えてくれた。

これだけの恩を受けて、どうやって返せばいいのか見当もつかないところだったので、いくらか迷った末に、町の総合病院に勤める内科の医者だが、なにか役に立てれば、と申し出てみた。

「ありがてえけれど、五年前に倒れて、病院じゃあ、はあこれ以上回復しねえからって家に帰されてそれっきりだから、なんともならねえと思うだよ」

そう口にしながらも、かよさんは腰を曲げて奥の部屋に案内してくれたのだった。

安男さんの右の上下肢注一はすべての関節が硬直していて、たしかに回復の余地はなさそうだった。発語も困難な様子だが、意識だけははっきりしていて、いい笑顔をたたえていた。

①「おらのワカサギ釣りは道楽じゃねえで、商売ですに。この父ちゃんの代わりにここの旅館だの民宿だのに頼まれて釣ってるですに。百匹で三百円になるから、多い日にやあ三千円もかせぐですに。昔、父ちゃんはもつと釣ったいなあ」

かよさんは寝たきりの夫に話しかけながら鼻をすすった。

「三千円ていうと、千匹も釣れることがあるんですか」

枕元すわに坐るかよさんに念を押すと、

「父ちゃんは二千匹も釣ってたもんですに」

と、安男さんの口角から流れ出るヨダレ注二を割烹着の裾で拭いてやりながら淡々と応じてくれた。

湖の上では土木作業員が着るような紺のジャンパーとオーバーズボンはいていたかよさんだが、今は色あせたジャージのズボンと手編みらしきセーターの上に灰色の割烹着をかけている。乱れた髪には白髪ばかりが目立ち、浅黒い顔には目尻と額に深

い皺^{しわ}が刻まれていた。山間の村ではありふれた初老のおばさん顔ではあったが、色素の薄い丸く澄んだ目が、娘の頃の愛らしさを残しているようにも見えた。

結局、その日は昼近くまでズボンが乾くのを待ってかよさんの家を辞した。この間、彼女は釣れたワカサギを台所で洗ってから、契約している旅館や民宿に配りに出かけ、帰って来ると安男さんがあてているという布のオムツを洗濯してストーブのまわりに干した。

かよさんと安男さん夫婦の間に子供はなく、安男さんは営林署に勤めていたが十年も前に定年退職した。ワカサギ釣りは安男さんの唯一の趣味で、かよさんも一緒になって氷上に坐り、釣った。もう三十年も前から釣っている。安男さんが退職した頃から旅館などに依頼されて釣るようになり、夫が倒れたあとも頼まれるまま小遣いかせぎに釣っている。だから私はプロだよ。かよさんはテキパキと家事をこなしながら、水に落ちかけて、パンツもはずずにストーブにあたっている哀れな素人を退屈させまいと話してくれていた。

「今度からさあ、おらのとなりで釣りやあいよいよ。こっちは仕事だから教えてるヒマなんかねえけど、見て覚えりやあいよいよ。これでワカサギ釣りもけっこう奥が深えもんだよ」

ようやく乾いたズボンをはき、何度も礼を述べると、かよさんは照れくさそうに目をそらしていた。

「とりあえずなあ、竿^{さお}を紙やすりで削って細くするだに。それと、オモリは五円玉をペンチでひねって赤く塗ること。それだけやってくりやあけっこう違うもんだよ」

外に出てから、追いかけてきたかよさんは秘伝の一部を耳元でそつと教えてくれた。

朝四時に家を出て七時半まで釣り、それから車で病院に直行し、釣れたワカサギは医局の冷蔵庫にしまつて八時半から医者としての仕事を開始する。ワカサギの釣れる十二月末から二月中旬まで、当直や夜間に呼び出された日を除いてすべてこの日課をこなした。

出るからさあ」というかよさんのセリフからすると、「祭りを待つ少女」というのは、

イ

を表しているのではないかな。

先生―そうですね。作品の最後に、かよさんの悲しみを描きつつも同時にそうした複雑な心境を表現することで、作品自体も単純に暗いだけ、あるいは明るいだけではない、複雑な余韻を読者にもたらすように作られているのですね。

問一 傍線部①について、以下の(1)・(2)の間に答えなさい。

- (1) かよさんはワカサギ釣りをどのようなものとして捉えているか、具体的に説明しなさい。
- (2) それに対して語り手は、ワカサギ釣りをどのようなものとして捉えているか、語り手の日常生活をふまえて説明しなさい。

問二 傍線部②について、「事が終わってしまったている」とは、この場合どのようなことを指しているか。また、そうした「予感があった」理由についても、説明しなさい。

問三 次に示すのは、右の文章を鑑賞した三人の生徒A・B・Cが、先生の問い掛けを受けて話し合っている場面である。空欄

ア・イに入る適切な内容を、本文をふまえて書きなさい。特にアについては、本文中の言葉をあげて根拠を示して書きなさい。

先生―傍線部③で、安男さんの死に対して「不思議になごやかな臨終の光景」と書かれているが、かよさんも語り手も、安男さんの死を悲しんでいないのでしょうか？ 話し合ってみて下さい。

生徒A―私は悲しんでいると思う。特にかよさんの方は

ア

から、悲しんでいることがわかるね。

生徒B―私もそう思うんだけど、でも傍線部④では、かよさんの目が「祭りを待つ少女のそれのようによく光っていた」ともあるけれど……これはどういうことかな。

生徒C―「どこか晴ればれとした表情」で「オムツをかたづけている」かよさんの様子や、「葬式が終わったらまた釣りに

かよさんの釣りは見事だった。塩化ビニールのパイプを細く削った竿の先に三センチばかりのゴム管を付け、それで微妙なアタリをとっていた。オモリは五円玉に赤いラッカー^{注四}を塗ったものをスクリュー状にひねっており、竿を上下させると仕掛けが水中で回転してワカサギを集めるようになっていた。

氷に開けた穴の三方を囲む木箱の中で風を防ぎ、アタリを見やすくして竿を軽く上下させると、先端のゴムが微かに動く。軽くあわせ、次のアタリを取り、またあわせる。要するにかよさんは七本ある針にできるだけ多くのワカサギを掛けてからようやく道糸をたぐり上げるのである。だから、三匹や四匹掛かっているのはあたりまえで、七本の針に全部ワカサギが付いてくるのも稀^{まれ}ではなかった。

「すごいですねえ」

はじめのうちはただあつけにとられていた。

「慣れだわ。慣れ」

かよさんは白い息に包まれながら黙々と釣り続けていた。

ときおり手をかざすミルク缶製のコンロに網を置き、釣れたワカサギを白焼きにしてから軽く塩をふってつまんでいたが、それがかよさんの朝食らしかった。

「食べてみとくれ」

うながされて何度か口に入れさせてもらったが、あっさりとした苦みのある上品な香りが口内に満ち、口元をゆるめる以外の表情を造れなくなったものだった。

こうして毎年冬になるとかよさんの横に並ばせてもらってワカサギを釣るようになった。

医者という仕事は年とともに肌になじまなくなっていた。青くさいつっぱりの意気などとうに捨て、平凡でもいいからとにかく心安らかに暮らしたいと精一杯の妥協をしても、病院に行けば死が待っていた。治療の成否とは無関係に、死すべき者は死んでゆくあたりまえで冷酷な現実をこれでもか、これでもかと見せつけられる毎日だった。死を他人事として器用に内部処理でき

なかったので、自らの余命の短さばかり考えて寝つかれない夜を重ねていた。まだ三十歳に満たない若造にとって、明日への樂觀を許されずに生きることは、暗い袋小路の直進にほかならなかった。

かよさんを師匠とあおいでひたすらワカサギの釣果を上げる。それは目で確認でき、数で記憶される進歩であり、向上であった。努力の果てに死を見なければならぬ臨床医の徒勞よりも、自らの手で食料を得るワカサギ釣りの原始的な労働の方がはるかに多くの明日を生きる活力を与えてくれたのだった。たとえそれがわびしい道楽に過ぎないと分かっているにしても、懸命にめり込むことで悲觀に包圍された毎日から頭だけは隠せそうな気がしていた。

ある二月初旬の早朝、いつものように湖畔の駐車場に車を止めて、トランクから釣り道具を出そうとしていると、かよさんが走り寄ってきた。

「父ちゃんの具合が変だだが、来ちゃあもらえませんか」

かよさんは待つていたらしく、釣り用のジャンパーではなく厚手のカーディガンをはおっていた。

「いいですよ」

そう答えて、小走りに行くかよさんのうしろに従ったのだが、なぜか事が終わってしまったている予感があった。

かよさんの肩に力が入っていなかった。足どりが軽かった。そしてなにより、彼女は全力で走ってはいなかった。

家に入ると、裸電球の灯る奥の間で安男さんは呼吸を止めていた。湖水に落ちかけた日以来、この家には来ていなかったのだが、湿っぽい暗さが群馬の生家を連想させた。懐かしかった。

「二、三日前から痰がからんでいただが、今朝起きてみたらこんなになっちまって。町の先生呼んだって来てくれるのは夜が明けてからだから、思いつきであそこで待つてたですに」

枕元に坐るかよさんは落ち着いていた。

安男さんのパジャマの胸をはだけ、右手で冷え始めている胸を押し、左耳を口にあててみたが、呼吸は出てこなかった。やは

り痰が気管に詰ったのだろうか。臉は静かに閉じられており、もちろん目立った外傷などない。

駐車場から点けてきた懐中電灯の光を入れても散大した瞳孔は動かず、死亡は確認された。

「残念ですが」

かよさんに頭を下げると、

「まあ、とんだ御迷惑をかけちゃって。ありがとうございました」

と、磨り減った畳に額がつくほどの最敬礼を返された。

③ 不思議になごやかな臨終の光景であった。狭く暗く寒い奥の部屋は、長わづらいの病人を家で看取った者の満足感と、死亡の責任を問われない医師の安堵感が混じり合ってきたおだやかな空気に満ちていた。これまで病院で体験してきた死の場面では胸の痛くなる緊張感しか覚えなかったのだが。

「死亡診断書を取ってきますから」

そう言い置いてかよさんの家を出、勤務先の病院に寄って事務の当直者から診断書をもらってもどると夜が明けかけていた。かよさんの家には近所の人たちが集まり、すでに通夜の準備が始まっていた。どこか晴ればれとした表情で台所のストーブのまわりに干していたオムツをかたづけているかよさんに死亡診断書を渡した。

「葬式が終わったらまた釣りに出るからさあ」

笑顔を造る途中でふいの涙におおわれながらも、かよさんの色素の薄い目は、祭りを待つ少女のそのようによく光っていた。

(南木佳士「冬物語」による)

注一 上下肢＝手と足。

注二 割烹着＝料理や家事などをする際に、服の上に着る仕事着。

注三 アタリ＝魚がエサにさわること。また、魚がエサを引く時に、竿や手などに伝わる感触。